

57頭のクマを確認

ルシャ地区では、直接目視やDNA分析によって、クマの個体識別を行っています。DNAは森の中に張った有刺鉄線やクマが背擦りを行う立木に引っかかった毛、新鮮な糞、ダート(注射筒)を命中させて取った組織から分析しています。今年10月中旬までに確認できたクマは、メス成獣が21頭、オス成獣が5頭、2～4才の若グマが2頭、1才が12頭、0才の子グマが14頭、その他区分不明が3頭の計57頭でした。

しかし、57頭がいつでも見られるわけではありません。たまにしか出てこないもの、姿は見せずDNAだけでしか確認できないものも多いのです。それらには、森の中にはいても人目につく海岸に出てこないものや、別の場所に住んでいてときおりここにやってくるものも含まれるでしょう。いつも見られる常連さんは14頭ほどです。



写真:今年初産の若い母グマ、ゴルビー。ガリガリにやせこけて、子グマも亡くしてしまいました。体長と胴高の比は写真から求めて分析する。

ガリガリから超肥満へ

知床のクマは、カラフトマスの遡上とエゾシカに大きく影響を受けています。道内の普通の地域のクマは、春から初夏にかけてフキなどの草本を大量に食べて生活します。ところが、シカが激増した知床ではシカが草を食べてしまい、クマが食べる草本の資源量が非常に少ないのです。一方、春先に死んだり弱ったシカや、6月に産まれる子ジカを食べることはできますが、その後はどんどんやせていき、8月上旬にはやせ細ってしまいます。川にマスが上がりはじめるとそれを食べて一気に体重が回復します。道内の他の地域では、夏に激ヤセすることはあまりないものの、人工ふ化のために人間が河口で魚を捕ってしまうので、魚をあてにはできません。そのために秋の木の実の豊凶が、冬眠前に十分太れるかどうかを左右します。知床では、豊富なサケマスによって、秋には必ず超肥満状態まで太ることができることが保証されています。

この夏もきびしかった

秋には必ず太ることができる知床のクマは一見幸せなように見えますが、ギリギリの状態です。2012年には例年8月上旬にはじまる遡上が9月初旬まで大幅に遅れ、餓死するものまで出ました。今年も、遡上開始が8月下旬まで遅れました。この夏も多くのヒグマがガリガリになり、0才の子14頭のうち今も生き残っているのが確かなのは5頭にすぎません。

今後、地球温暖化による気候変動などでマスの遡上が変化すれば、知床のヒグマたちは存亡の危機に立たされる可能性があります。私たちは今、ヒグマの栄養状態を知るために、体長と胴の高さの比を写真から分析する試みを行っています。(山中正実)

表:季節による知床のヒグマの栄養状態の変化の特徴

	春	初夏	夏	秋
知床半島のクマ	肥満: 前年の蓄積で、肥満したまま目ざめる	急速にやせていく: 6月までは子ジカを食べられるが、その後はやせる一方	ガリガリでマスを待つ: 8月上旬にガリガリに、マスが川にのぼると回復開始	必ず超肥満: マスを食べてV字回復。木の実が実ればさらにハッピー
道内の普通のクマ	時にはやせて: 前年に木の实が不作ならやせている?	回復へ: フキなどの草本を大量に食べて体重を回復してゆく	やせてはいても: 最もやせるが、激ヤセまではならない?	肥満できない年も: 秋の实りで太るが、不作の年は厳しい。魚は食えない。

この調査は、ダイキン工業株式会社のご支援のもと、知床財団と知床博物館、北海道大学獣医学研究科との共同研究により行われています。現地調査は知床漁業生産組合の皆さんの全面的な協力で支えられています。

発行 知床博物館協力会 2015.10.27  
 099-4113 北海道斜里郡斜里町本町49  
 斜里町立知床博物館内  
 TEL: 0152-23-1256 FAX: 0152-23-1257  
<http://shiretoko-ms.sakura.ne.jp/>